

「大牢」

「なまごちそう」

「なのか漢字に秘められた熱き思い」

中国は文字の国だけあって、ひとつひとつの文字に、深い英知と興趣に富む歴史をひそませている。

たとえば、ごちそうを意味する言葉に「大牢」と「小牢」、の区別があるが、牢を「罪人を入れておくオリ」とばかり思い込んでいる人には、大きなオリや小さなオリがなぜごちそうなのか、まるで、見当もつかないことだろう。というのも、牢という字は、牛の上に「ウ」（ウカムリ）つまり屋根がついた形で、もともとは牛や豚などの家畜を飼っておく囲い、ないしはオリを意味するものだった。

この場合、文字が示すように、牛が家畜の代表とみなされていたわけだが、同じ家畜の豚の上に屋根をつけた「家」は、もとは「豚小屋」を意味するものだったのが、のちに人間さまの住まいを表すものに昇格して、この点、牛にとっては耐えがたい？ 差別となった。しかしこの牢には、のちになって「神に捧げるいけにえ」の意味が与えられ、この牢に大、小の比較形容詞をつけた「大牢」「小牢」がともにごちそうを意味する言葉となったのである。そこで、この大牢と小牢の違いだが、大牢は「牛、豚、羊の三つが揃ったごちそう」、小牢は、このうち牛が欠けた「豚と羊だけのごちそう」を意味し、これで大いに牛の自尊心を満足させてやろうというわけである。

せてやろうというわけである。

ところで「牢」の字に、はじめのうちにあった「神に捧げるいけにえ」の意味は、のちに「ずばりそれを意味する「犠牲」という文字がつくられた。

ともに「牛偏」になっているのを見てわかるように、ここでも牛に花？ を持たせている。「犠」も「牲」も、それぞれ一字で、「いけにえ」の意味を持つが、とくに「牲」は、牛偏

に「生」の作字からもわかるように、「生きたままの牛」を意味し、事実、神に捧げる牛は「生きた牛」というのが古代の習わしだった。しかし、この場合、なぜ牛が代表に選ばれたかについては、牛は自分が殺されるのを知ってか知らずでか、神前に引き出されても一向に平気で、よくその分を心得ていると、古代の中国人は見た。

もつとも、牛の中にも神に見えめられた幸運児がいる、中国の古い時代には「額の白い牛と鼻のそり返っている豚、痔持ちの人間」の三つは神もお嫌いになるからと、「犠牲」に供することをまぬがれたという。額の白い牛は「白額」と呼ばれた。

